

科技高 いきものの記

Vol.53 2022.6.15

生物教員 佐藤龍平

子守りをする亜社会性カメムシ エサキモンキツノカメムシ

いきもの記vol.50で紹介したアカスジキンカメムシを見た物理のM先生が「よく見たらカメムシの顔って可愛いんですね。」と言ってくれた。しめしめ、これでまたカメムシファンが1人増えたな。ということで、またカメムシの話題だ。今回紹介するのは“**ハートカメムシ**”ことエサキモンキツノカメムシだ。見ての通り、背中にハートの模様がある可愛いカメムシである。これほど明瞭なハート型の模様を持つ生物はあまりいないだろう。さらに、見た目だけでなく、大変興味深いことに、昆虫としてはとても珍しい「**子育て行動**」を行うカメムシとして注目されている（正確には卵や幼虫の“保護行動”）。

昆虫で子や家族の世話をするのは、奇しくも前号でタツキが取り上げたシロアリの仲間や、ハチやアリといった社会性昆虫で、こういった明確な役割分担がある生き物は“**真社会性**”と呼ぶ。それに対し、エサキモンキツノカメムシのように、シロアリほどの社会は作らないが、**子供の保護・世話などを行う場合は“亜社会性”**と呼ばれている。社会性や子育てがどのように進化したのかを考える上で非常に重要な立ち位置にいるのだ。カメムシの仲間には卵や幼虫を保護するものが多い。エサキモンキツノカメムシと同じツノカメムシ科のヒメツノカメムシ、キンカメムシ科のアカギカメムシ、ツチカメムシ科のミツボシツチカメムシを始め、タガメやコオイムシ（子どもを背負うから“子負い虫”）なども有名だ。カメムシの仲間ではないがハサミムシなども子育て行動を行う（母は最終的に子に食べられる…。究極の子育てだ。）。

母カメムシの保護行動にはどのくらいの効果があるのだろうか。調べてみると、卵を狙うアリなどは母親の威嚇に恐れをなして逃げ出してしまおうと、かなりの効果がありそうだ。だが、寄生バチの中には母カメムシをかいぐって寄生するものもあるらしい。攻める側と守る側の攻防の進化も非常に興味深い。卵の孵化率を調べて母カメムシの保護行動の効果を分析してみたら面白いかも。

エサキモンキツノカメムシのメスは子供が育つまで飲まず食わずで、甲斐甲斐しく子供の面倒を見る。キュートなハート模様でしかも子育てするとあれば、世の中の子育て世代の親御さんの共感を呼び、カメムシの地位がさらに向上すること間違いなしだろう。



1 齢幼虫を保護している“亜社会性”のエサキモンキツノカメムシ *Sastragala esakii*

メスは覆いかぶさるようにして卵を保護する。卵が孵化した後も2 齢幼虫になるまで保護し続け、アリやクモなどから我が子を守る。しつこい敵には、翅を広げて威嚇したり、異臭攻撃をすることもあるそうだ。



卵を守ろうとする行動 卵に覆いかぶさるエサキモンキツノカメムシのメスに指を近づけてみると、②のようにからだを低くして卵を守るような保護態勢をとった。

ハゼノキ上のエサキモンキツノカメムシ

図鑑などを見るとミズキの葉を最も好むと書いてあるが、猿江公園ではミズキではほぼ見られず（トサミズキ上で1度見たのみ）、1本だけ生えているハゼノキの上に多数の個体が見られる。6/14に目視でざっと数えただけでも19匹のメスが卵を保護していた。



交尾するペア（左がメス）